

# 現れる国の「人格」

久保 雅義（新潟県 教員）

## ●はじめに：応募の動機

大学で教員をしていますので「ヒトづくり」に興味があります。「最近の学生は内向きであり、海外への興味は以前に比べてむしろ低下している」と言われています。私の印象も同様ですが、これは今の学生が悪いわけではなく「海外への興味など持たなくても別に困りはしない」という環境からくる当然の結果でしょう。しかし「困りはしない」というレベルで落ちてしまう学生はダイナミックな社会の変化に対応できず、その才能を発揮することなく埋もれていきます。これは大変な社会的損失です。これからの日本を支える、より広い視野をもちグローバルに活躍できる人材を作り出すにはどうすればよいのか、そのヒントが国際協力活動にあると考えました。

## ●国際協力活動について、海外派遣前に抱いていた印象や考え：謎だらけ

国際協力活動のうち、青年海外協力隊の活動については、何名かのOB/OGと話す機会があり、具体的なイメージは頭の中にもありませんでした。また、職場である大学にはJICAとの連携で作らされた大学院プログラムもあり、JICA事業の中でも「市民参加協力」についてはある程度理解していたつもりです。

都市のインフラ整備などを含む無償・有償資金協力事業については、「開発途上国を助けているんだろうな」という程度の知識でした。ただし、東日本大震災前のことですが、中国は日本のODAを受けている時にでも、アフリカ諸国に対してODAを提供しているという「噂」は覚えていました。「なぜ援助を受けている状態の国が、他の国に援助できるのか？」という素朴な疑問には簡単な答えがありそうな気が全くなかったです。やはり何か我々にはわからない理屈があるに違いないと、もやもやした気持ちでしたが、自分で解明するという行動には至りませんでした。

今回の研修の事前レクチャーで、「日本は戦後復興のためにODAを受けており、その償還をはたしたのが1990年代である」とか「東北の大震災があった時には、日本が世界で最大のODA享受国であった」などを知りました。ODAが「お金がない国に対して先進国が恵みを施す…というほど簡単ではない」ということはわかってきました。今回の研修に向けての準備段階で、普段は訪れることのない外務省やJICAのウェブサイトなどをインターネットで探してみると驚くほどたくさんの情報が得られました。これも「エチオピアに行く」と決まったから、調べてみようという気持ちになったものです。逆にいうと、このような機会がないと誰にも見てもらえない「宝の持ち腐れ」状態の情報です。正直、自分の教養を高めるためにこれら情報にアクセスする人はまずいないでしょう。

## ●国際協力活動についての帰国後の考え：グレーゾーン

今回の視察の結果として、見返りをもとめる「投資」的な支援とは一線を画す、日本流の支援があることは理解できました。日本は特に「人」に注力して支援しています。ただ物資を渡すだけでなく現地の人々の自立を考えているし、現地に残る日本のプレゼンスに加え、調整力・説得力・人を動かす力を身につけた人材が個人・企業のレベルで育てられます。彼ら彼女らはこれからの日本に必要な「グローバル人材」であり、まさに一石二鳥、すばらしい！しかし、いじわるく考えれば、今回はJICAによる研修であるため「うまく機能していない」「無駄遣いである」事業などはみられるはずもありません。お客さんが家に来るときは、だれでも部屋の掃除くらいはするでしょう。

今回の視察を経験してみて、国際協力活動にさらに賛成の気持ちになりました。同時に「これだけ国内問題が山積しているのになぜ他の国を援助するのか？」という問いに対して説明責任をはたさなければ、国民の共感に支持された国際協力活動はできない時代だとも思います。しかし「援助の金額が国家予算の何%なのか」「金額のつじつまがあっているのか」等の説明はいくら正確でも多くの国民には「説得力」とは感じられません。私の職場の大学で考えると、学ぶ意欲のない学生への説明は大量の時間とエネルギーを消費するわりには成果があがりづらいが、学ぶ意欲のある学生への説明は、一種の共同作業であり、成果があがるだけでなく説明する側にも大きな喜びが得られます。国際協力に対する共感を広く得るには、「国民」に対する説明責任というよりも、「説明を求めている国民」



エチオピア経済にとって「重要すぎる橋」

への説明責任をはたすことが必要条件だと思いました。

いったいどういう人が「説明を求めている国民」なのだろう？私は、今回の視察で国際協力に対する意識が急激に高まりました。「百聞は一見にしかず」は本当でした。しかし、一個人が、あるいは一企業が海外で国際協力活動をするというハードルは高く、限られた人数しか直接経験できません。では、日本において国際協力活動ができるとなるとどうでしょう？開発途上国の技術者に対する日本国内での研修はその一つの例ですが、そのような国際協力なら「私のところでもできそうだ」という人や企業が増えませんか？私が特に大事だと思うのは、そのような研修の「間接的」な関係者です。研修の様子をちらちらと垣間見ることのできる、職場の周りの人達、その家族、そしてその地域の人々が、「国際協力活動ってなんだ？」と説明を求めたくなるまであと一步の「グレーゾーン」に入ります。ちなみに、このレポートを手にとって読んでいる方々は既にグレーゾーンは超えていますね。

グレーゾーンの人達を増やすには、実際に国際協力事業を経験した人達の話聞いてもらうのも有効に思えます。今回の研修で出会った人達は例外なく情熱にあふれ、非常に説得力のあるお話をされる方ばかりでした。企業活動として国際協力を体験された方々は、それぞれの企業でそのノウハウを伝授していくのですが、青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、あるいはNGOなどの市民参加事業で培われた情熱・説得力はどこにいってしまうのでしょうか？私の周りの青年海外協力隊OB・OGは一人の例外を除いて、すべて国際協力に関係のない「普通」の仕事に就いています。機会があったとしても時折「国際協力に興味のある人達」の会で話す機会がある程度です。それならば、海外滞在期間終了後の一定期間は小中学校の授業の一部として熱い体験談を話して回る、国際協力のエバンジェリストとして是非とも活躍していただきたいと思いました。二つの意味で「鉄は熱いうちに打て」です。話す方も聞く方も熱いからです。

### ●日本の皆さんに伝えたいメッセージ：グローバル化した世界での日本

グローバル化の波は既に到来しています。これから先、好むと好まざるとに関わらず「グローバル化しない」という選択肢があるかといわれれば答えは「ない」だと思います。ただグローバル化したからといって「世界全体が1つになって、どこに行っても同じような景色」とはなりません。

身のまわりの洋服や食品を考えれば、すでにグローバル化は済んでいます。中国、ベトナムなどの東南アジア、ペルーなどの中南米の製品、ひよっとするとエチオピアのコーヒーもあるかもしれません。そして、物流がグローバル化したからこそ「日本はXXXだ」といえるものが輝きます。超高品質のお米・果物や神戸ビーフのような世界ブランドまで成長します。

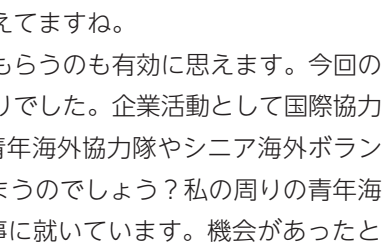
情報のグローバル化は何をもたらすでしょう？「MANGA」はいまや世界で知らない人はいません。もちろんエチオピアでも知られています。さらに、駅前の自転車置き場に自転車が順に並んでいるとか、ATMの前でちゃんと列を作ってならんでいるとか、落とした財布が警察にとどけられる…などは、他の国では全く考えられないことで、まさに「日本はXXXだ」と驚きをもって知られています。

人に顔や人格があるように、グローバル化した世界では国の「顔」や「人格」があります。日本流の国際協力活動を通じて、エチオピアでは「日本はきちりとした仕事をする国」「日本は約束を守る国」として知られていることがわかりました。このような「信頼感」は他に代えることのできない日本の宝物です。また「信頼感」は得るのは大変ですが、失うのは簡単です。「あの人はそういう人だから…」と、いったんネガティブに思われるとなかなか覆すことはできないのはみなさんご承知のとおりです。「信頼は金で買えない」とはよくいったもので、国際社会における日々の活動が信頼感をつみあげる原動力であることに私はまったく疑いはありません。「信頼感」のない国が、グローバル化した世界でプレーヤーとなることはできないでしょう。そして私はグローバル化した世界で日本が主要なプレーヤーであって欲しいと願っています。

今回の視察では、ODAの実行組織であるJICA職員の方々にたいへんお世話になりました。日本国内で国際協力活動を支えている方々、そして実際に現地で直接活動に携わっている方々とお話をし、生き生きと仕事をされている様子を見ることができてたいへん力強く感じました。このレポートを読まれた方々が、自分の周りの方々を次から次へと「国際協力活動について知りたくなるまであと一步」のグレーゾーンに引き込んでいただければエチオピア研修の甲斐があったというものです。



決して終わることない「KAIZEN」への道



決断の瞬間



エチオピアの未来を託す「苗」